

# 小学校社会科における対話を生み出す工夫

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 初等教科教育分野 赤澤練

## 1. 研究目的

「学習指導要領（平成29年告示）解説社会科編」では「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善は「生涯に渡り、能動的に学び続けることができるようにする」ことを目指すためであるとしている。本研究では「対話的な学び」に着目した。

対話的な学びを実現した授業とは、学習指導要領の解説リーフレット『生きる力 学びの、その先へ』によれば、「周りの人たちと共に考え、学び、新しい発見や豊かな発想が生まれる授業」とされている。つまり、社会科の授業であれば、授業の中で示される課題について、児童たちが自ら考え、グラフや図などの資料などをもとに議論し、児童にとって新たな発見をするなどしながら課題を解決していく授業であるといえる。したがって、このような対話的な授業を実現させるためには、児童自身が課題について主体的に問い、資料を参照し、これを根拠としながら議論できるようにすることが求められるであろう。そうであるならば、まずは、児童自身が授業における課題を自らのものとするのが重要であろう。本研究では、「発問」もしくは「問いかけ」に着目することにした。なぜならば、教師の「発問」をきっかけにして、児童の「問い」が形成されるからである。そこで、「問いかけについて」森分の研究を参照した。

森分（1980）は、「探求活動は子どもが行っていくのであって、教師はこれを援助し導いていく」授業を重視する。つまり、児童主体の授業である。続けて森分は「子どもの探求活動を援助し導いていく手立てとなるのは『発問・資料』である」と述べている。教師の「発問」は、先にも述べた通り児童の問いになるからであり、「資料」は児童自身の問いを解決していくた

めの根拠となるからである。

さらに、森分は、教師の発問は、児童にとって困難なものであるべきとし、そのことによって児童に考えさせることができるからであるとする。具体的には「なぜ」という理由を問いかけることが必要とする。このことにより「社会的問題の間違ってない理解、説明ができるようになる」と述べている。

以上のことを踏まえ、子どもが問いを持ち、対話を展開させることで考えを広げ、深めることができるよう発問を工夫した授業の実践を試み、評価することで、指導技術の向上を目指すことが本研究の目的である。

## 2. 授業計画

- (1) 実習校…山梨県内の公立小学校
- (2) 対象…第5学年
- (3) 時期…令和4年10月
- (4) 授業内容

- ① 単元名「未来をつくり出す工業生産」
- ② 小単元名「日本の工業生産と貿易・運輸（主な輸出品と輸入品）」
- ③ 本時のめあて

日本の主な輸出入品の種類と変化に着目し、日本の貿易の特色を捉えよう

### ④ 授業の概要

日本の主な輸出入品の種類と変化に関するグラフを読み取り、変化の意味について考え、日本の貿易の特色について理解する授業である。輸出品について、日本は加工したものを輸出していること、そして、輸入品について、日本は原材料となるものを中心に輸入していることを理解する。

### ⑤ 問いの構造図

児童が、論理的かつ段階的に考えられるよう

にすること目的に「問いの構造図」(図1)をあらかじめ作成する。「問いの構造図」は、森分(1980)を参照し、ここではMQ(Main Question)及びMA(Main Answer)、SQ(Sub Question)で構成した。児童の思考過程を問いの関係によって整理し、図として表すことで、教師の発問を構成することができるようにするものである。

MQ:なぜ日本は加工したものを輸出しているのか?
MA:輸入したものを国内で加工し、世界に輸出することで、利益に繋がるから?
SQ1:日本はどのようなものを輸出・輸入しているのだろうか?(教科書を見ずに予想)
SQ2:年代別グラフから、何を輸出・輸入しているのだろうか?
SQ2-1:1980年の日本の輸出品はどのようなものがあるか?
SQ2-2:2018年になり、輸出品はどのように変化したのか?
SQ2-3:1980年の日本の輸入品はどのようなものがあるか?
SQ2-4:2018年になって輸入品はどのように変化したのか?
SQ4:輸出品と輸入品を比べるとどんなことに気付くのだろうか?

【図1:問いの構造図】

### ⑥ 本時の展開

あらかじめ作成した「問いの構造図」に基づき、次のように授業を計画した(表1)。

【表1:本時の展開】

学習過程	学習活動と内容
	SQに繋がる発問(○) MQに繋がる発問(◎)
導入	・校外学習の復習
	日本の主な輸出入品の種類と変化に着目し 日本の貿易の特色を捉えよう

展開①	○日本はどのようなものを輸出・輸入しているのか(教科書見ずに実施) ・年代別でグラフを読み取る(1980・2018) ○輸出ではどのようなものがあるか(年代別で行う) ○年代を比較して日本の輸出の特徴とは何か。なぜそう思ったのか ○輸入ではどのようなものがあるのか(年代別で行う) ○年代を比較して日本の輸入の特徴とは何か。なぜそう思ったのか
展開② グループ活動	・輸出・輸入を比較しよう ◎資料から見てどんなことが言えるか。お金や品の量、疑問に思うことなどそれぞれ意見を出し合いながら話し合おう ◎国内で加工するということは費用が掛かってしまう。それでも日本の利益に繋がるのだろうか
まとめ	・日本は、原材料や部品を輸入することで、国内で加工し、世界に輸出することで、利益を出していることが特色である

## 3. 授業実践と分析

### (1) 授業実践

導入では、先週行われた校外学習のことに触れながら既習事項の確認を行った。校外学習とは自動車工場見学である。このことについて、思い出してもらい、部品の製造やその部品を完成後にどこに届けるのかなどを説明してもらったことについて触れて、その後本単元の学習に入る。

この導入部では、既習事項について触れるためいくつかの質問を行った。なお、導入段階で

の「発問」はあえて「発問」と区別して「質問」と表記することにした。なぜならば、本研究では、問いかけに対する答えが児童にとって既知であり、このことを思い出し、確認するための問いかけのことを「質問」としたいからである。つまり、子どもの思考を促し対話に結びつける「発問」と区別したいと考えたからである。

さて、既習事項を確認するための複数の質問を通して、児童とのやり取りをすることで本単元において導入段階で触れておきたい「関連工場」「車の部品」「部品は海外にも届ける」というキーワードに触れることができた(表2)。

【表2：導入時の児童とのやり取り】

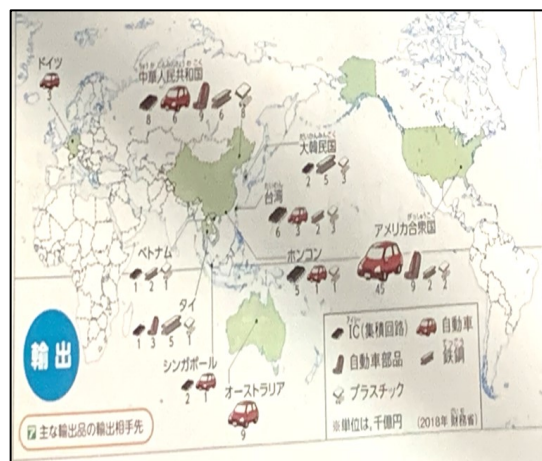
T	: (工場名) ってどんな会社かな?
C1	: 何かの車を作る場所。
C2	: (メーカー名) の車だよ。
C3	: (メーカー名) の車を作る、「関連工場」だよ。
T	: C3 が関連工場と言ってくれました。どんなものを作っているのかな?
C5	: 本社とかにパーツ(部品)を持っていくと思う。
T	: それは国内だけなのかな?
C(全員)	: 「海外にも持っていく」

そして、「海外にも持っていく」という児童の発言を学級全体で確認し、本単元の展開①に繋げることができた。

展開①では、予想することから始めた。「日本はどのようなものを輸出入しているのか」という発問をきっかけにして教科書を見ずに予想するようにした。輸出・輸入の意味については、これまでの授業や校外学習で学んできているため、多くの予想が児童から出るのではないかと想定することができた。予想の段階で出た回答は「自動車(もしくは自動車部品)」という回答が約7割で最も多く、他に「機械類」「小麦」「衣類」などの回答があった。

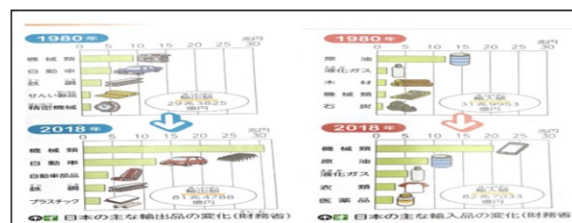
その後、日本の輸出入の状況を教科書の資料(図2)を見ながら予想したことと比較しながら、

実際の輸出入の状況を確認した。



【図2：輸出入の状況を表した地図の一部】

続いて年代別の輸出入の状況をグラフ(図3)から読み取る活動を行った。



【図3：年代別の輸出入の状況】

1980年と2018年の日本の輸出入の状況のグラフをそれぞれ読み取った。期待される回答例として、輸出品については「日本は加工しているものを輸出している」こと。輸入品については「日本は原材料となるものを中心に輸入している」ことが挙げられる。実際の授業では、児童たちはおおむね期待される回答をすることができた。展開①では、このようにグラフの読み取りを通して日本の輸出入の特色を把握させるようにした。

展開②では、主にグループ活動を行った。各グループで4つのグラフを比較することを通して「原材料を輸入しているのに、加工して輸出している」ことや「機械類を輸入して機械類を輸出している」ことについて気付き、理解することを目指す。そのために「資料から見てどのようなことが言えますか。お金や品量、疑問に思うことなど、それぞれ意見を出し合ってみ

よう」と発問した。この発問の後の児童同士のやり取りは以下の通りである。

【表3：グループでの話し合い①】

C1	:他の国から輸入した機械類を、加工して輸出している。
C2	:繰り返しているということ？
C1	:そうそう。買ったものを加工して輸出している。
C3	:だからあまり儲けがないよね。
C4	:輸入も輸出も2018年になってかなりお金が掛かっているよね。
C1	:輸入品は大きく品が変わっている。
C3	:輸出品はアメリカに送っているよね。
C2	:お金の差はすごいと思う。
C4	:商品が多くなっているということは、沢山作っているから大量生産だね。

発問に対して、各グループで話し合い活動が展開した。しかし、一部のグループは活動が停滞してしまっていたため、思考を促すために次の発問をした。「国内で加工するということは、お金が掛かる。それでも日本の利益に繋がるのだろうか？（なぜ加工したものを輸出しているのだろうか）」

この発問をした後、再度グループで話合ってもらった。その際の児童同士のやり取りは以下の通りである。

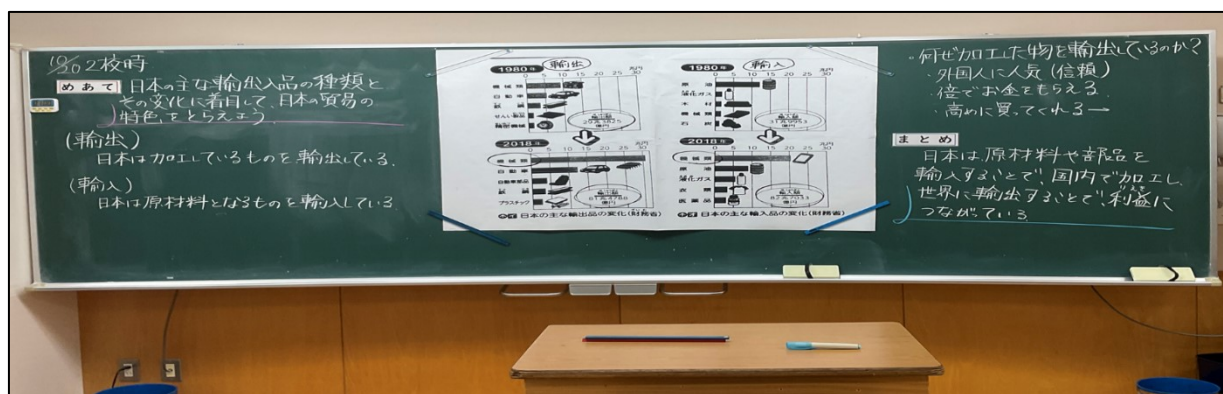
【表4：グループでの話し合い②】

C1	:売れるから？
C2	:加工する前と後では差が生まれるから。
C1	:買ってそのまま輸出するよりも、加工して輸出した方が売れるのかな？
C3	:そのままのものを輸出してしまうと、信頼がなくなってしまう、輸入できなくなってしまうんじゃないかな？
C4	:じゃあ、まとめると、加工して良いものを送った方が売れるし、信頼も得ることができる。で良いかな？
C (全員)	:そうだね、そうしよう。

グループ活動の後、話し合ったことについてグループごとに発表してもらい、これに基づいて「原材料や部品を輸入することで、国内で加工し、世界に輸出することで、利益を出していることが特色である。」とまとめた。実際の板書が(図4)である。

(2) 分析と考察

本研究の目的に基づいて、つまり、児童が問いを持ち、その問いについて対話を通して学習を実現できたかどうかということについて、実践した授業を分析・考察する。



【図4：実際の板書】

ここで注目することができるのは、「表4：グループでの話し合い②」である。

日本の輸出・輸入における特色を確認し、「なぜ加工してから輸出を日本はしているのか」という理由を考えさせるための発問を児童の考えを深めるために行った場面である。C1はすぐに「売れるから？」と半ば疑問を残したまま答えた。これに対しC2は「加工する前と後では差が生まれるから。」と具体的に意見を言った。この答えに対してC1は「買ってそのまま輸出するよりも、加工して輸出した方が売れるのかな？」と問いかけた。これに対しC3は「そのままのものを輸出してしまうと、信頼がなくなってしまい、輸入できなくなってしまわないか」と答えた。（ここで児童が言う「信頼」とは、日本で加工した製品は、質が高く、信頼できるものであるため高く売ることができるのではないか、という別の場面での意見交流に基づく言葉である。）C4は「じゃあ、まとめると、加工して良いものを送った方が売れるし、信頼も得ることができる。で良いかな」とグループの意見をまとめた。

この活動の実際から児童の考えを深めるための発問は有効に働いていたということがわかる。「なぜ」という理由を考えさせるための発問は、児童にとって難しさを伴うと考えることができる。難しすぎれば、児童は問うことをあきらめてしまうかもしれない。しかし、難しい問いに対応できるようにあらかじめ予備的な発問（SQを形成する発問）をし、難しい問いを考えるための予備的な思考をあらかじめしておくことができたからこそ、このような対話が実現したといえるのではないだろうか。

具体的に「図1：問いの構造図」に即して確認すると、SQ2-2、SQ2-4では、1980年と2018年を比較するため、児童は「なぜ」といった疑問を生み出し、考えさせることができた。また、SQ2によって日本の輸出・輸入品の特色を抑えることができたことから、SQ3のグループ活動において「なぜ」という困難な発問を出すことができ、児童はその問いについて段階的に考えてきたことを活用することで、対応することが

できたと考えられる。

#### 4. 成果と課題

以上の分析・考察から授業を通して得られた成果は、対話を生み出すためには、児童にとって考えたいような、ある程度難しい発問が効果的であることが明らかになった。そのためには、発問を段階的に構成し、具体的に考えるよう発問・資料を工夫することが大切であると言えた。つまり、「問いの構造図」は有効に働いたと言える。

しかし、授業実践を通して課題が残った。それは、一斉指導では対話を生み出すことができなかったということである

このことについては、「表2：導入時の児童とのやり取り」で示したような「確認する質問」をしてしまうことが多くなってしまったことに要因の一つがあった。既習事項や既知のことを確認する質問では、児童から問いを生み出すことができない。また、問いが生まれにくいことは対話も成立することができない。また、児童同士の対話を生み出すためには、もっと児童の意見から取り上げ、意見の内容に応じてその場で発問をするということが大事であることが分かった。

また、発言に消極的な児童が発言できるように工夫をすることが必要であると考えられる。授業中に全ての児童が積極的に行うことは難しいと考えられる。そのため、発言に消極的な児童が発言しやすいように、グループ活動を行うことやペアでの活動を授業内で繰り返し行うことなどで発言しやすい環境を作ることが大切であるのではないかと考える。

さらに、児童の発言を深めたり、他の児童に繋げたりするように工夫をするということが必要であったのではないかと考える。児童の発言を深めるために、児童から出た意見等をただ「そうだね」と認めてしまうだけでなく、なぜそう思ったのか理由を聞き、その意見を全体に共有することで、一つの意見に対して他の児童が意見を言えるような流れを作ることができれば、教室全体でも対話が生まれるのではない

かと考える。

これらは、対話を生むための直接的な工夫に関わる課題点であるが、間接的な工夫に関わる課題点もあった。つまり、資料の提示の工夫である。図2の年代別グラフを拡大印刷し、黒板に貼り付けたことに工夫の余地があった。このような資料を用意した理由は、資料を黒板に貼り付けることにより児童の視線を前に向けることができ、教師の指示や発問を児童がしっかり受け止めることができるようにするためである。教科書に示されている資料をそのまま授業で用いようとする、資料を確認するために児童の視線は自ずと下に向かう。また、机上の限られたスペースに教科書やノートを置かなければならない。そのため、教科書内の資料を確認するためにノートを教科書の上から避けるなどの動作が必要になり、また、資料を確認するそのつど開くべきページ数を支持しなければならないことになる。些細なことではあるが、このことで教師の指示は複雑になるし、児童は資料を確認する作業に時間を割いてしまうことになる。結果として、児童が考え、対話する時間が不足してしまう。そこで、資料を印刷し、黒板に貼り付けた(図4)。このことで時間を有効に活用することはできたと考えられる。

しかし、白黒のまま印刷、提示してしまったことから、グラフに示された内容が見えにくく感じる児童がいた。色が付いているものと付いていないものでは明らかに違うということがわかった。

以上の課題を踏まえ、発問・資料の適切さを検討すること、特に教室全体での対話を実現させる検討を重視し、同時に「問い」の構造についてさらに研究をしていきたいと考える。

#### 【引用・参考文献】

- ・文部科学省『学習指導要領(平成29年告示) 解説社会科編』
- ・文部科学省(2017)『生きる力 学びの、その先へ』
- ・森分孝治(1980)『社会科授業構成の理論と方法』明治図書
- ・渡部竜也・井手口泰典(2020)『社会科授業づくりの理論と方法』明治図書